

# 富士山と江ノ島をつなぐ六伝説を追つて

外国語学部 国際文化交流学科2年 渡辺 朱里

ことは明確である。

はじめに

小学校の時地域学習で、富士山西麓富士宮市にある一つの洞窟に潜った。ぬかるんだ足元、滴り落ちてくる冷たい水、夏なのに息が白くなる冷涼な空気、軒々と内部の脇に安置される石像や祠、そして先の見えぬ暗さからくる妙な恐怖感。洞窟のガイドの方に案内されながら、溶岩石やその暗がりのせいでそう容易くは先へ進むことができなかつたことを覚えている。ただ、当時の私は、その洞窟が持つ意味や歴史上の存在感など全く知らず、分かつていたのは、富士山の噴火によつて成立した洞窟なのだ』といふことにだけ、その日の体験を、ただの肝試し半分の洞窟探検というふうにしか捉えていた。

士の巻狩りを行つた。

江ノ島岩屋：神奈川県藤沢市にある周囲四キロメートル程の陸繫島の奥に、波の浸食で形成された洞窟。第一岩屋と第二岩屋と二つある。弁財天と龍が祀られている。

## 【一】古典文献の中の人穴

まずは、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』と、室町時代成立した御伽草子の中の武家物に属し、英雄伝説物ともされる『富士の人穴草子』の二つに注目してみよう。それらに共通する前半の部分だけの大まかなあらすじを、以下に述べてみる。

世は鎌倉時代。二代将軍源頼家が富士山麓朝霧で巻狩りを行つてゐたところ、人穴という奇怪な洞窟の話を聞いた。そこで和田平太に探検を命じたが、彼の探検は失敗に終わつた。次に仁田（新田）四郎忠常にそれを命じた。五人の従者を連れて入洞した仁田が見たものは：ここから両書に若干違いが現れる。その概要をまとめておく。

1『吾妻鏡（東鑑）』：洞窟の中の率直な様子。暗い・水浸し・氣味の悪い岩壁・大量の大蛇・蝙蝠・怪しい光などが記されている。また、仁田四郎は真つ白な着物と髪の、鬼とも

それから少し経つて、ある地域刊行物の中で、その洞窟に関する記事を読む機会があり、そこで初めて自分の潜つた『人穴』という洞窟が、神奈川県の江ノ島の岩屋に繋がつてゐるという伝説があることを知つた。江ノ島にはよく遊びに行つた事があり、岩屋洞窟へも入つたことがあつた。

この時は純粹に、しかし半信半疑にこの伝説を信じてしまつてゐたが、よく考えれば、富士山の噴火によつてできた溶岩洞窟である人穴と、波の浸食によつてできた江ノ島の岩屋とが繋がつてゐるはずがない。それに、本当に繋がつてゐるとすれば、日本最長の洞窟をゆうに上回る長さとなる。とすれば、この時点ですでに、『富士の人穴と江ノ島の岩屋が通じている』といふ伝説は、あくまでも伝説に過ぎないといふ

ことから少しがつて、ある地域刊行物の中で、その洞窟に関する記事を読む機会があり、そこで初めて自分の潜つた『人穴』という洞窟が、神奈川県の江ノ島の岩屋に繋がつてゐるという伝説があることを知つた。江ノ島にはよく遊びに行つた事があり、岩屋洞窟へも入つたことがあつた。

この時は純粹に、しかし半信半疑にこの伝説を信じてしまつてゐたが、よく考えれば、富士山の噴火によつてできた溶岩洞窟である人穴と、波の浸食によつてできた江ノ島の岩屋とが繋がつてゐるはずがない。それに、本当に繋がつてゐるとすれば、日本最長の洞窟をゆうに上回る長さとなる。とすれば、この時点ですでに、『富士の人穴と江ノ島の岩屋が通じている』といふ伝説は、あくまでも伝説に過ぎないといふ

ことから少しがつて、ある地域刊行物の中で、その洞窟に関する記事を読む機会があり、そこで初めて自分の潜つた『人穴』という洞窟が、神奈川県の江ノ島の岩屋に繋がつてゐるという伝説があることを知つた。江ノ島にはよく遊びに行つた事があり、岩屋洞窟へも入つたことがあつた。

この時は純粹に、しかし半信半疑にこの伝説を信じてしまつてゐたが、よく考えれば、富士山の噴火によつてできた溶岩洞窟である人穴と、波の浸食によつてできた江ノ島の岩屋とが繋がつてゐるはずがない。それに、本当に繋がつてゐるとすれば、日本最長の洞窟をゆうに上回る長さとなる。とすれば、この時点ですでに、『富士の人穴と江ノ島の岩屋が通じている』といふ伝説は、あくまでも伝説に過ぎないといふ

ことから少しがつて、ある地域刊行物の中で、その洞窟に関する記事を読む機会があり、そこで初めて自分の潜つた『人穴』という洞窟が、神奈川県の江ノ島の岩屋に繋がつてゐるという伝説があることを知つた。江ノ島にはよく遊びに行つた事があり、岩屋洞窟へも入つたことがあつた。

この時は純粹に、しかし半信半疑にこの伝説を信じてしまつてゐたが、よく考えれば、富士山の噴火によつてできた溶岩洞窟である人穴と、波の浸食によつてできた江ノ島の岩屋とが繋がつてゐるはずがない。それに、本当に繋がつてゐるとすれば、日本最長の洞窟をゆうに上回る長さとなる。とすれば、この時点ですでに、『富士の人穴と江ノ島の岩屋が通じている』といふ伝説は、あくまでも伝説に過ぎないといふ

しかし、地理学的な事実がどうであるかとは別に、私が興味を抱くのは、なぜそのような伝説が生まれたのだろうか、ということである。実際、江ノ島の岩屋や富士の人穴には現在、互いに繋がつてゐるという看板も立てられている（図1）。また、それぞれが所在する富士宮市や藤沢市の観光課による資料にも、このことは必ず記載されている。これらの他にも、「富士山と繋がつてゐる」とか、「江ノ島と繋がつてゐる」といった形で、一方的に通じてゐることを

語る伝説はいくつも存在する。しかし、この人穴と江ノ島だけが双方向的な関係にあるのだ。本論ではその伝説発祥の真相に踏み込んでみようと思う。

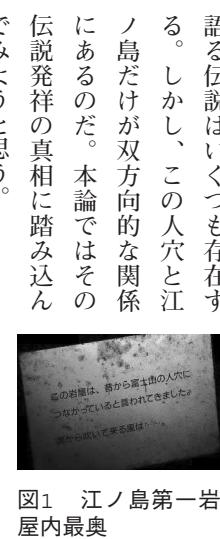


図1 江ノ島第一岩屋内最奥

## 2『富士の人穴草子』：奇々怪々な見学ツア

1. 美女、毒蛇、童子に変じた富士山神浅間大菩薩が出現する。仁田四郎は、頼家拝領の剣と引き換えてそれを鎮め、命からがら頼家の元に逃げ帰る。ただし、戻つてこられたのは仁田一人のみであつた。

## 【二】修験道史

修験道とは、日本古来の山岳信仰に仏教（特に密教）・神道が加わつたもので、呪術や修行などを活動内容とした実践的宗教である。山岳に登つたり洞窟に入つたりして修行を積み、大

自然の験力を得ようとすることを特徴としている。修験者は各地登山路を開拓し、疫病や天災で苦悩している町や村で祈祷したり、札を配つて歩いたりする人々のことを指し、日本の古代から全国各地に存在していた。その白装束は、後に天狗のモデルともなつた。私の生まれ育つた故郷富士宮市は、富士山を信仰する修験者が多くいて、また富士山を目当てに日本各地から訪れた人々で賑わつたという歴史を持つ。思い返せば、自分の生活にも修験道の影響が意外と大きかつた。

この兩作では、ともに問題の伝説には一切触れてはいなかつた。しかしその中で明らかになつたことは、作者または当時の人々が崇めていた神や信仰の存在が、この二作品に大きく影響しているということであり、そしてそれが大きかつた。

連することである。さらに、その修験道の中で

次に、修験道の歴史を、浅間信仰、富士山信仰、富士講、江ノ島周辺の修験道（石老山頭鏡寺（神奈川県津久井郡）を本拠とする八菅修験）

と合わせて、時代を追つてまとめるごとに、次のようになる。この中に、先ほど取りあげた『吾妻鏡』と『富士の人穴草子』も、あわせて位置づけておきたい。

**紀元前** 古代以前よりの日本人の大自然（特に山岳や森林）に対する信仰心＝山岳信仰が全ての基礎となる。山麓での祭祀がやがて神社神道へ展開していく。

人々は富士山の大爆発に恐れを抱く。天皇による浅間（火山の意）大神の祭祀がなされる（富士山本宮浅間大社の起源）。浅間信仰の存在と表裏の関係にあるのだろう。

**飛鳥時代**（後に修驗道の開祖とされた）役小角（えんのおづぬ）の活動開始。大和国葛城山・吉野金峰山・大峯等や、流刑先の伊豆大島や江ノ島で活動が伝えられている。

**奈良時代** 仏教が伝来し、神道・道教・陰陽道・儒教の影響を受けた仏教者が、古くから神靈の住まう他界と見なされた山岳に入つて修行（呪術宗教的活動）を開始。実践的な儀礼を中心とする宗教であった。また浅間信仰は、荒ぶる山を鎮めるものとして富士山麓で崇拜され、また全国各地に浅間神社が建立されていった。



図2 清都富士山中里東京瀬市

詠まれたり、浮世絵などにも描かれていたのも江戸時代に富士講がかなり栄えていたという背景を持つている。信仰心の薄れてしまつた現代の日本人の心に富士山が日本のシンボルであるという感覚が染み付いているのは、単に日本一高く、見るに美しい山であるという事だけでなく、富士講をとおして長い間人々の心の拠り所となつてきたことも大きく関与しているものと考えられる。

#### 【四】形を変える『人穴草子』

ところで、ほとんどの古典文献においてそうであるように、『吾妻鏡』も『人穴草子』も長年の間書きを繰り返して現在まで伝えられてきた。ゆえにその途中で内容が変えられてしまつたこともしばしばあった。特に『人穴草子』は漢文体ではなく仮名書きの文章で一般民衆の手に渡つたりもしたため、今現存している『人穴草子』はどれも文体や表現はさまざまである。

(\*1)

例え、元は同じ人穴草子でも、後の草子受容者の目的を大きく二分する写本の出され方が

**平安時代** 密教（仏教の一）と結びつく。空海・最澄による山岳仏教の提唱をうけ、山岳に寺院が建設され始め、山岳仏教が栄える。平安中期以降、修行の結果加持祈祷において著しい効験を表すという考えが広がり、彼らは「修験者」、「山伏」と呼ばれる。

○役小角を開祖に仮託して修験道成立  
○江ノ島での修驗道開拓（八管（はすげ）修験）  
○鎌倉時代 修験道―― 熊野山伏（本山派）

○江ノ島での修驗道開拓（八管（はすげ）修験）  
○役小角を開祖に仮託して修験道成立  
○江ノ島での修驗道開拓（八管（はすげ）修験）  
○仁田四郎の人穴探検・『吾妻鏡』の編纂

○村山（富士宮市内・人穴よりも南富士山麓）  
が富士山修験道の拠点定着

○『富士の人穴草子』の成立（富士信仰の広まり）  
○富士山を大日如来としてまつる山伏達（富士山伏の出現）

それに危機感を感じた江戸幕府は、政策として山伏を本山派か当山派かいざれかに所属させ、遊行を禁止した。定住化が進む。

○中期（享保年間）食行（じきぎょう）身禄の活躍により、富士講の爆発的成長（寛政）  
○江戸中心に富士信仰が広まる。

現の違い

以下、それぞれについて概説していく。

### 一、仁田四郎の探検の一昼夜説

六月四日 庚子 隅

巳の刻、新田の四郎忠常人穴を出て帰参す。

往還一日一夜を経るなり。：

先に【二】古典文献の中の人穴で示したように、『吾妻鏡』でも、それ以降の文献でも、人穴に入った仁田の探検は一日半の旅程だったと伝えられた。このことから、人穴の洞窟を通して江ノ島（または鎌倉）まで行つて帰つてきたのはどういう概念が生まれた。（\*2）

### 二、富士講徒の富士山登拝経路

寛政～天保（一七八九～一八三〇）年代頃、江戸を中心とした関東方面で富士講が最盛期を迎へ、富士吉田登山口が大変繁榮した。当時、島～江戸、という一つの登拝経路ができ上がり、江戸～富士吉田～富士登山～人穴～大山～江ノ島～江戸、といふ（この道を“ふじ大山道”と言つた）を経

穴の洞窟を指す言葉でも、さまざまな表現がされていて。“岩屋”とは洞窟そのものを指す言葉なのか、江ノ島の岩屋を指しているのか、あやふやなところである。言葉というものはその時代や生活背景、享受する側の解釈によって変わってしまうものだ。こうして書写の段階で本來“人穴の洞窟”に戻つてきただどこかで少しずつ間違つて解釈されてしまつたのではないだろうか。仁田が出てきた所を江ノ島の岩屋とする、最後の『富士人穴由来記』の記述は、そのことを典型的に表している例と言える。

### 五、地理的条件

人穴は富士山の西麓に位置する（図3）。西

という方角は仏教的に淨土としての地理的認識を持つ。それだけに密教要素の多く含まれた修験道にはとても深い意味のある場所なのだが、



#### 【終わりに】

以上の事柄のうち、一～三が伝説発祥の基盤

\*1 「富士の人穴草子—研究と資料—」

小山一成 文化書房博文社 一九八三年

\*2 「富士宮むかし語り」

遠藤秀男 一九八〇年

\*3 富士吉田市歴史民俗博物館学芸員

堀内さんのお話による。

て、最後に役小角の修行場であつた江ノ島を回るという、『三山参り』が帰路として人気だつたという。（\*3）この経路の存在があつたと機としての役割を果たしたのではないだろうか。

#### 三、書写、受容する信仰者の思い

鎌倉時代、江ノ島は將軍のお膝元として大変賑わつてゐたことから、当時すでに関東方面にも広まつてゐた浅間信仰の影響で当地の人々が富士山に思いを馳せ、己の基盤と信仰の聖地を結びつけたいという思いが芽生えた。また、江ノ島は弁天様関連の御縁起や八音修験の外なる聖地でもあつたため、人々はそうした靈験深い場所同士を結びつけて信仰していた。

やがて江戸時代に入ると、全盛を迎えた富士講など富士山や人穴への信仰において、富士登山や人穴入洞を日常化させたいという信仰者の思いが、各地の富士塚や洞窟巡りに反映された。それと同じように、初めは周辺修験者の想像に過ぎなかつたことが世に広まつていつた可能性も想定できる。ある場所に通ずる、という言い伝えのある洞窟が各地に幾つも存在するのはこうした考え方からくるのであろう。

・『富士野人穴御縁起』享和三（一八〇三）年本：“岩やのそとへ出給ふ” “新田岩やのようたい申さんとすれば…”  
・『富士野人穴』書写年不明確：“いわやの口へそいて給ふ”  
・『富士之人穴』弘化二（一八四五）年頃本：“人穴の口にそ出にけり、…”  
・『富士人穴由来記』弘化四（一八四七）年本：“則三七廿一日目に鎌倉江の島弁財天の岩屋に同日寅の一天に出でたり、…”

四、書写段階（または口頭伝承）での誤字・表現の違い

そして私が特に注目したいのは、寛延年代（一七八八～）頃から『人穴草子』書写の風潮が高まつたことの影響である。

#### 『吾妻鏡』では

六月四日 庚子 隅

巳の刻、新田の四郎忠常人穴を出て帰参す。

往還一日一夜を経るなり。：

と、人穴から仁田が出てきたことを明記している。

・『富士野人穴御縁起』享和三（一八〇三）年本：“岩やのそとへ出給ふ” “新田岩やのようたい申さんとすれば…”

・『富士野人穴』書写年不明確：“いわやの口へそいて給ふ”

・『富士之人穴』弘化二（一八四五）年本：“人穴の口にそ出にけり、…”

・『富士人穴由来記』弘化四（一八四七）年本：“則三七廿一日目に鎌倉江の島弁財天の岩屋に同日寅の一天に出でたり、…”

全て同じ場面の文章なのだが、このように人



図5 富士山登獄記念碑（富士吉田）



図6 富士山禪定図

がつてゐることを想像し、或いはそれを誤伝したり誤解したりすることにおいても、常に人々は富士山や江ノ島など自然そのものを崇拜し、靈験を貰い受けようとする切なる思いを持ち続

## 《参考文献・ホームページ》

・富士市立博物館

<http://www.city.fuji.shizuoka.jp/cityhall/>

・『富士の研究叢書3 富士の信仰』 井野邊茂雄  
古今書院 一九二八年

・『目で見る 富士宮の歴史』 遠藤秀男  
緑星社 一九七七年

・『山岳宗教史研究叢書<sup>6</sup>』

・『山岳宗教と民間信仰の研究』 桜井徳太郎編  
名著出版 一九八一年

・『富士講の歴史～江戸庶民の山岳信仰～』

岩料小一郎 名著出版 一九八三年

・『怪奇と伝説 富士の洞窟探検』 遠藤秀男

緑星社 一九八三年

・『江戸の小さな神々』 宮田登 青土社

一九九七年

- ・富士宮市役所HP  
<http://www.city.fujinomiyashizuoka.jp/>
- ・藤沢市役所HP  
<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>
- ・藤沢市観光課HP  
<http://www.cityfujisawa.ne.jp/kankou/index.html>
- ・江ノ島神社HP  
<http://www.enoshimajinja.or.jp/>